# 演奏する喜びがあふれるほどに伝わってくる、そんなオーケストラ。

——真鍋圭子

ミュンヘンの宮廷楽団を前身とするこのバイエルン国立歌劇場管弦楽団は、現存するオーケストラ中最古のものである。ウィーンやドレスデンの宮廷楽団よりずっと早く組織され、1530年以来の団員の全メンバー表が今に至るまでずっと残っている。ヨーロッパ中を旅行して歩いたモーツァルトが、このオーケストラに接して感嘆したことも、父親への手紙に書かれている。彼がこの劇場、この管弦楽団用に作曲した名作「イドメネオ」は、オーケストラ・パートが難しく、当時の他の劇場では演奏できなかったという。ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」もこの劇場で初演されたが、やはりこのオーケストラの実力があってこそ初演可能となったのである。

宮廷指揮者としてここに就職することを熱望したモーツァルト、国王ルートヴィッヒII世の熱烈な擁護のもとに4作品をここで初演できたワーグナー、ミュンヘン生れでこの劇場の常任指揮者を二度務めたリヒャルト・シュトラウス。この三人の作曲家の音楽の伝統は、このオーケストラの中で世代から世代へと受け継がれて今に至っている。

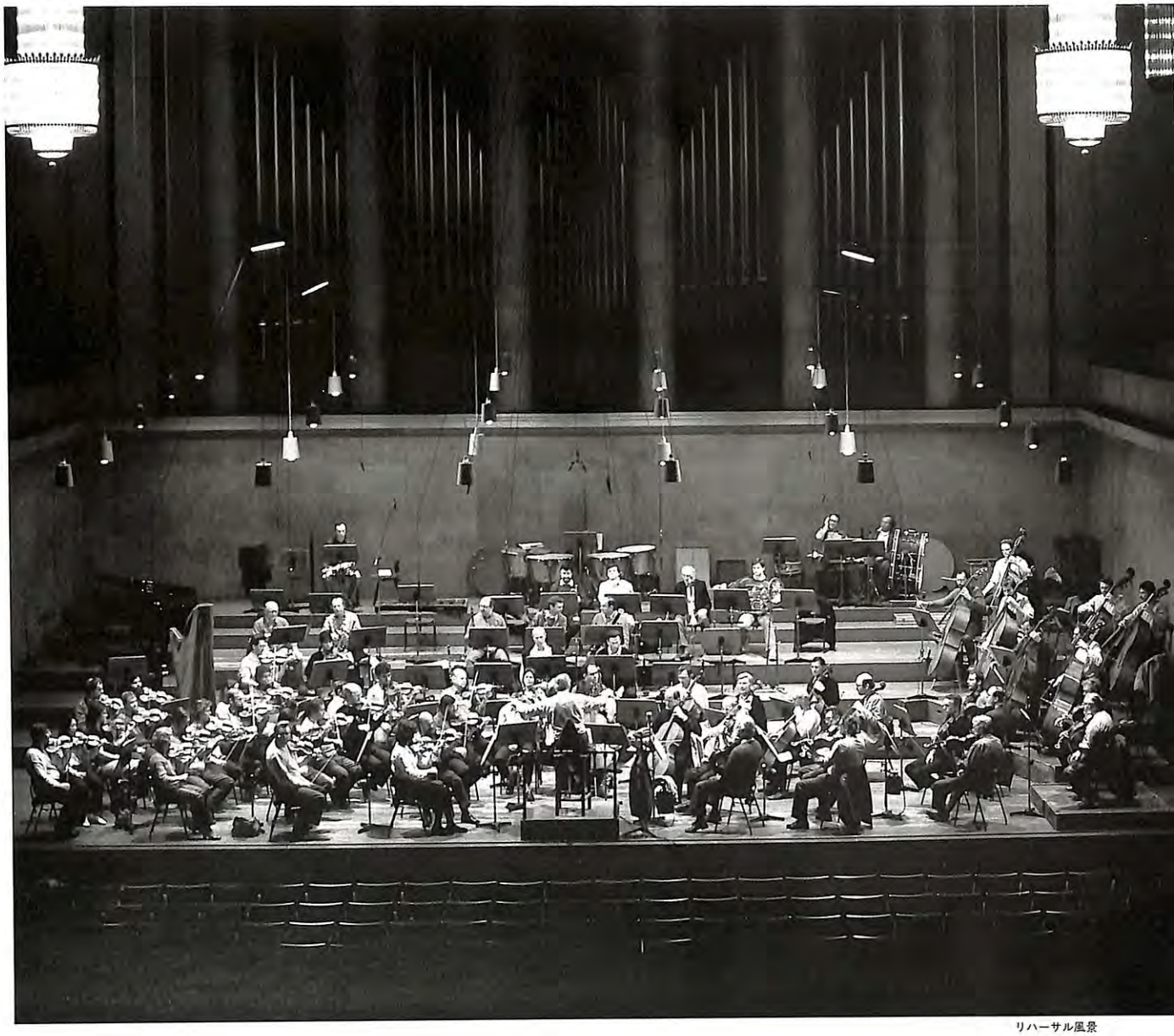
ブルーノ・ワルター、R・シュトラウス、カール・ベーム、H・クナッパーツブッシュ、クレメンス・クラウス、ヨーゼフ・カイルベルト等の音楽総監督の後をついで、1971年以来ヴォルフガンク・サヴァリッシュがこの伝統の継承に全身全霊を捧げている。

この管弦楽団はウィーン・フィルと同じく国立歌劇場付の楽団ではあるが、独立したコンサート・シリーズを持っていて、コンサート・オーケストラとしての活躍も目ざましい。二年前にカルロス・クライバーとの演奏旅行で日本でもおなじみである。サヴァリッシュが音楽監督になって以来、その水準は着実に高くなっていて、今やオペラのオーケストラとしてはウィーンと並び称される実力を持っている。ミュンヘンにオーケストラは四つあるが、このバイエルン国立歌劇場管弦楽団の特徴はその音楽監督の影響からか、いつも安定しているということ。そして、バレエでも現代曲でもいいかげんな演奏、手をぬいた演奏をしないということである。他のオーケストラに比べて演奏回数が比較にならない程多いにもかかわらず、このオーケストラの団員は、いつも演奏に対する喜びを持っているのが客席に如実に伝わってくる。これが、このオーケストラの最大の魅力である。

このレコードの曲目は、彼等にとって耳慣れている音楽とはいえ、演奏するのは初めてのものばかり。細部の小さな不揃いまでサヴァリッシュに厳しく指摘されるので、一同緊張に次ぐ緊張。ブルックナーやブラームスの交響曲の録音の数倍も集中力を必要としたという。その結果、この録音は比較的地味な活動をしているこの管弦楽団の、ブリリアントな実力を示す素晴しい名刺となることだろう。

ヘラクレスザール外観





リハーサル風景

# 純粋な音楽の道を歩みつづけて、頂点で活躍を続けるマエストロ。

——真鍋圭子

テレビ、ラジオを通して日本全国津々浦々、その名と顔とを一番良く知られている指揮者は何といってもヴォルフガンク・サヴァリッシュであろう。それもそのはず、彼は1964年の東京オリンピックの年に初来日して以来、67年からは毎年NHK交響楽団を指揮するために、もう20年以上、一年たりとも欠かすことなく日本を訪問しているからである。またこの間、ウィーン交響楽団とスイス・ロマンド管弦楽団を率いて来日、名演奏の数々を聴かせてくれている。

1950年代の初めから、サヴァリッシュはカラヤンの次の世代を担う若きドイツ音楽界のホープとして、輝かしいスター街道を走り始めていた。1953年、30歳を迎えるまでに、ベルリン・フィル、ザルツブルク音楽祭、バイロイト音楽祭へのデビューを飾り、彼の名は一躍ヨーロッパ音楽界の話題を総ざらいしてしまったのである。カラヤンのレコーディング・プロデューサーとして名高いワルター・レッゲが即座にサヴァリッシュをロンドンに招き、翌年からはフィルハーモニア管弦楽団とレコーディングを始めている。

日本に初来日した頃のサヴァリッシュは、ヨーロッパの主要都市、主要オーケストラ、主要劇場を制覇しつくした、まさに破竹の勢いの若きマエストロであった。ところが、サヴァリッシュの音楽観、人生観、性格は、すでにこのような音楽産業やマスコミの喧噪に一線を画し始めていた。極めて繊細な神経の持主で、謙虚でシャイなこの人は自分の意志なくマネージャーの思惑によって動かされたり、音楽産業の意図によりレパートリーを決定させられたりすることに嫌気を覚えたのだろう。ある時からサヴァリッシュは、これ等の世界に明らかに背を向けて一人歩きをするようになった。若くして頂点をきわめ尽くしてしまった人だからこそできる、〝going my way〟の精神である。そしてその〝道〟とは、雑念のない純粋な音楽の道であった。

5歳の頃からピアノを始め、音楽学校に入るまでに音楽理論、作曲をすべて個人レッスンで学んでいたサヴァリッシュは、戦後ミュンヘンの高等音楽学校に入学し、わずか一学期で卒業試験にパスしてしまう。すぐに隣町のアウグスブルクのオペラハウスに就職したが、当時のミュンヘンの〝新音楽〟というサークルで、戦前は演奏することが許可されていなかったフランス音楽やロシア音楽の譜面を山のように積み上げて夜っぴいて演奏し続けたとのこと。とにかく、この人は音楽することが職業というより、趣味なのである。サヴァリッシュのピアノは、それだけでファン層がある程だが、彼はピアニストになろうと思ったことはなかったとのこと。この分野もただただ彼の音楽することの一部なのである。

彼がピアノを練習しているのを聞いたことがないと、彼を16歳の時から知っている夫人が言う。仕事が大変な時、リラックスするためにピアノを弾き、ピアノを弾き終るとどんなストレスも解消して、また上機嫌になるのだという。サヴァリッシュは現在、バイエルン国立歌劇場の総監督の地位にある。バイエルン州の主都ミュンヘンにあるナショナル劇場とその隣りにある旧レジデンス劇場、その裏手にあるマールシュタール実験劇場の三つの劇場の公演の総責任者であり、1,300人の従業員をかかえる地方自治体の一組織の運営責任者なのである。さらに、指揮者として音楽総監督の任務も兼任しているから、その多忙さは想像を絶する。

サヴァリッシュのミュンヘンでの毎日は、朝9時ぴったりに彼の劇場の執務室に始まる。会社の社長と同じく、机の上に積み上げられた書類に目を通し、サインをする。控室は病院の待ち合い室のように、彼と話す機会を待っている人達であふれている。10時からは、音楽練習のある時は1時まで練習、1時からは新しい歌手のオーディション。これが無い時は続いて事務仕事。食事に帰宅、とんぼ帰りでまた劇場、そして仕事の続き。夜に彼が指揮をする時だけは、午後を休養と準備の時間としている。1971年からバイエルン国立歌劇場の音楽総監督を引き受けているが、それにプラスして今の〝オペラ・ディレクター〟の責を担ってからはや7年余り。こんな超人的ハードスケジュールをこなしているサヴァリッシュを内から支えているのは、自分の生れ故郷ミュンヘンのこの劇場、自分が子供の頃両親に連れられて来て指揮者になることを決心したこの劇場への愛情に他ならない。世界中の名だたる劇場で指揮をしてきた経験から、この劇場がそれ等より勝るとも劣るとは思われない。こんなに素晴しい劇場で音楽できるチャンスがあるのに、何故他で指揮しなければならないのか、というのが彼の持論。

現在のバイエルン国立歌劇場は、サヴァリッシュのこれだけの愛情の成果が着実に実を結び、この劇場の歴史の中でも一大黄金時代を生み出している。18年間に渡る彼の指導のもとで、オーケストラは今やベストの状態にある。

これ程多忙のサヴァリッシュが世界の名だたるオーケストラからの招きを断り、毎年日本のために5週間もの時間を作っているのは世界の音楽界の七不思議だという。理由はただ一つ、自分の劇場を愛しているのと同様、彼は日本と、日本人とNHK交響楽団を愛しているのだ。レコーディング嫌いのサヴァリッシュが今回の録音を引き受けてくれたのも、これが日本の会社からの申し出だったからだと思う。レパートリーも、彼とこのオーケストラにとっては珍らしいものだが、

スタッフとのミーティング風景

自分達の〝音楽的遠足〟と名付けて、セッションには念には念を入れ、自分達に十分納得のいくまで、脱帽する程丁寧に真剣に真面目に録音していた。録音完了後、サヴァリッシュは一言、「いい録音になったと思いますよ。」この自分に厳しい人が自らこんなことを言うのは始めてだとは、トーン・マイスターの弁。歴史的名盤が誕生したようである。

# スペイン奇想曲

## ヴォルフガンク・サヴァリッシュ
## バイエルン国立歌劇場管弦楽団

**Side 1**

1. 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲
（グリンカ曲）……5'19"
2. 中央アジアの高原にて（ボロディン曲）……7'21"

**Side 2**

1. 交響詩「禿山の一夜」（ムソルグスキー曲） 10'50"

**Side 3**

1. 組曲「道化師」作品26
（カバレフスキー曲）……13'54"

プロローグ
ギャロップ
行進曲
ワルツ
パントマイム
間奏曲
叙情的なシーン
ガヴォット
スケルツォ
エピローグ

2. 「三つのオレンジへの恋」作品33より
（プロコフィエフ曲）…3'59"

行進曲 & スケルツォ

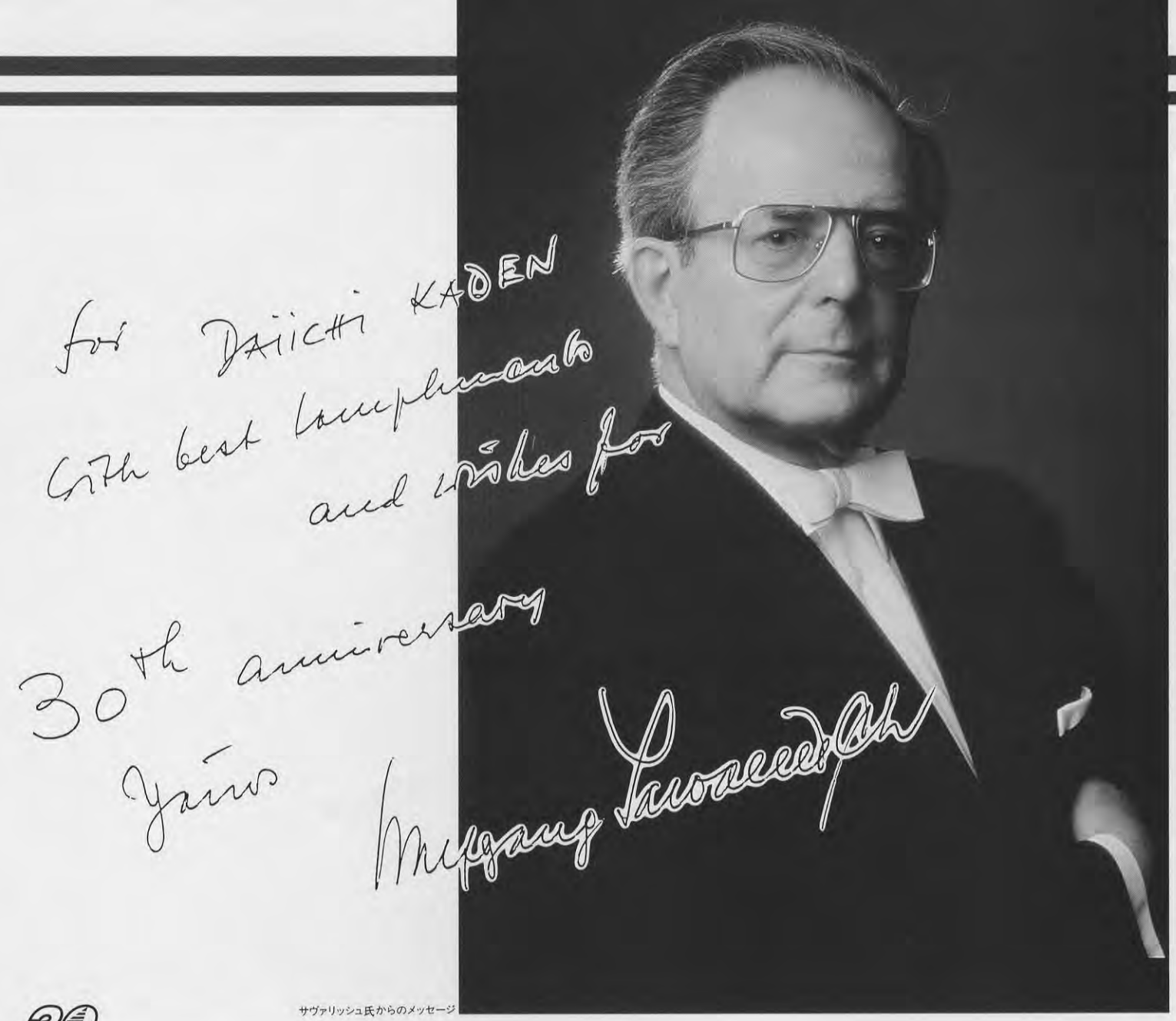
**Side 4**

1. スペイン奇想曲作品34
（リムスキー=コルサコフ曲）……15'33"

W/ルイス・ミハル（ヴァイオリン・ソロ）～Side 4

写真：NHK交響楽団提供

DAM PC
STEREO DOR-0159・60




サヴァリッシュ氏からのメッセージ

## Das Bayerische Staatsorchester

**1. Violine**
Ingo Sinnhöffer・Luis Michal・Angel-Jésus Garcia・Eva Maria Nagora・Demetrius Polyzoides・Heinrich Köthe・Wolfgang Leopolder・Christa Milrad・Rudolf Klier・Erich Gargerle・Richard Oelkers・Elfriede von Noë・Nikola Nikolic・Hiroko Yoshida・Erich Pizka・Joachim Boruvka・Kai Bernhöft・Maria Moscher・Jan Gruszecki・Aldo Volpini・Rainer Sadlik・Annette Krusenbaum・Cäcilie Sproß

**2. Violine**
Eberhard Soltau・Rudolf Schmidt・Katharina Lindenbaum-Schwarz・Adrian Lazar・Siegfried Schwarz・Heinz Werner・Heinz Deubel・Karl Mayer・Helmut Steger・Jürgen Frehde・Bernd Wunderlich・Brigitte Schwittek・Jiři Kveton・Susanne Langer・Marilyn-Marie Knüppel・Walter Probst・Ulrich Grußendorf・Klaus Huber・Eckhart Hermann

**Viola**
Fritz Ruf・Roland Metzger・Gerhard Breini・Wolfgang Reschke・Kurt Plank・Peter Blaumer・Josef Merki・Ottmar Machan・Hans Habig・Christian Radakovits・Friedbert Welscher・Trudie Horváth・Peter Kugler・Roland Krüger・Esa Kamu・Florian Ruf

**Violoncello**
Franz Amann・Peter Wöpke・Yves Savary・Wolfram Reuthe・Friedrich Kleinknecht・Hans Joachim Link・Franz Krause・Alexander Teuner・Hans Dieter Kruse・Viktor Weywara・Karl Heinz Feit・Horstmar Probst・Wolfgang Bergius・Gerhard Zank

**Kontrabaß**
Christoph Möhle・Walter Götz・Alfred Nickel・Peter Schell・Wolfram Schmid・Pankraz Brendel・Heinz Peter Müller・Uwe Thielmann・Wolfgang Lauppe

**Harfe**
Ingeborg Fauss・Michael Scheer

**Flöte**
Gernot Woll・Hermann Klemeyer・Wolfgang Haag・Klaus Holsten・Fritz Peter Ruppert・Wilfried Elstner

**Oboe**
Hagen Wangenheim・Simon Dent・Klaus König・Gottfried Sirotek・Bernhard Emmerling・Helmut Wollenweber

**Klarinette**
Ivan Mähr・Hans Schöneberger・Klaus Sass・Horst Schwantner・Hubert Hilser・Hartmut Graf

**Fagott**
Oswald Herget・Detlev Kühl・Klaus Botzky・Kurt Meister・Dietmar Heinrich・Dietrich Kallensee

**Horn**
Hans Pizka・Siegfried Machata・Karl-Heinz Fedder・Hans Walter Burkhart・Rainer Schmitz・Volker Hardt・Wolfram Sirotek・Manfred Neukirchner・Rolf Jürgen Eisermann・Sebastian Huber

**Trompete**
Christian Böld・Gerd Zapf・Manfred Klette・Walter Maier

**Posaune**
Carl Lenthe・Robert Kamleiter・Franz Eder・Lothar Zirkelbach・Heinz Weiher・Richard Heunisch

**Tuba**
Rudolf Güra・Robert Tucci

**Pauke**
Siegfried Wolf・Gerd Quellmelz

**Schlagzeug**
Hermann Holler・Walter Haupt・Hugo Dümig・Ralph Peinkofer・Andreas Vonderthann

---

創立30周年記念盤

### ごあいさつ

ＤＡＭ会員の皆様には、益々ご清祥のこととお慶び申しあげます。弊社はお陰を持ちまして、本年11月、創立30周年を迎えることができました。30年間の長きに亘る皆様のご愛顧に、社員一同、心より御礼申しあげます。ここにお届け致しますＤＡＭオリジナル・ディスクは創立30周年の感謝を込めて制作致しました記念盤でございます。既に、アナログ・ディスク、コンパクト・ディスクを合わせ、150タイトルを越えるソフトを制作し、毎回、会員の皆様を始め、業界各方面でも、そのクオリティの高さで注目を集めていますが、この創立30周年記念盤は、いわばこうしたソフトの集大成であり、さらに皆様にお喜びいただけるソフト作りの新たな一歩となるものであります。この一枚をご家族の皆様で心行くまでお楽しみ戴ければ幸いに存じます。

さて、弊社は創業以来、特にオーディオ、ビジュアル分野に積極的に取組み、単にＡＶ機器の販売に止まらず、ＡＶを豊かにお楽しみいただくための様々な催しをご提供して参りました。有名アーティストを招いての生録音会、コンサートへのご招待、数々のＡＶセミナーなど、その時々の話題性や、新技術を逸早く検証する進取の気風に富んだ企画により、皆様のご支持を得て回を重ねております。弊社はこれからも、ＡＶのハードウェアとソフトウェアは不可分のものとの考えで、諸政策を実施してまいる所存です。その一環として昨秋よりＡＶソフト宅配システム「そふとっきゅう」を始めました。創立30周年を機に、今後も今まで以上に時代を尖鋭にとらえ、新たな試み、新たな企画により、皆様のＡＶライフにご奉仕して参ります。

変わらぬご支援、お引立てよろしくお願い申しあげます。

第一家庭電器株式会社　代表取締役社長・星野 孝

---

**●制作にあたって**

日頃は、第一家庭電器をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。本年11月で当社は創立30周年を迎えさせていただきましたが、その記念として、６月の「サヴァリッシュ⊙マドンナの宝石」に続く、PART II「サヴァリッシュ⊙スペイン奇想曲」を制作いたしました。

DAM45は、制作を開始して以来、15年目となりましたが、その間、誰にでも親しまれているオーケストラの小品集をオリジナル録音したいという希望を持ち続けていたところ、この度、世界的な巨匠サヴァリッシュ氏の指揮と、ヨーロッパ最古の歴史を誇る名門バイエルン国立歌劇場管弦楽団という最高の組み合せで実現の運びとなりました。

このDAM初の海外オリジナル録音は、去る５月に24金蒸着CD２枚組として、VIPメイト会員の皆様には、世界に先がけて提供させていただきましたが、アナログ・ディスク・ファンのご要望にお答えして、２枚ずつ、２回に分けて企画いたしました。

サヴァリッシュ氏は、NHK交響楽団の名誉指揮者として、TVを通じて有名な方ですが、日頃のレパートリーは大曲が多く、日本で本アルバムのような小品を指揮されることは殆んどありません。それを、サヴァリッシュ氏が音楽総監督をされている、バイエルン国立歌劇場の来日公演（本年11月～12月）を記念して、DAMの希望による名曲集を、心よくレコーディングしていただいたことは、世界の音楽界でも異例なこととのことです。

その真摯で、品格の高い純音楽的な演奏は数あるオーケストラ名曲集の中でも、１２位を争う名盤が完成したと自負している次第です。

録音も、ミュンヘンのヘラクレスザールで、ドイツ人スタッフにより２チャンネル・デジタル録音されていますが、スケール感と奥行感のある豊かな音は、ヨーロッパ録音特有のものといえましょう。

ところで、DAMオリジナル録音は、アナログとデジタルの両方式で録るよう心がけていますが、今回は海外初録音ということもあって、契約等の事情で残念ながらデジタル録音のみ、となってしまいました。

レコード化にあたっては、デジタル・マスターを一度、アナログ・テープにダビングしたものからもカッティングしてみましたが、DAM本来のポリシィである、複製は極力せずにマスターに忠実にしたいという観点から、デジタル・マスターから、ダイレクトにカッティングしています。

又、このところアナログ・ディスクの技術進歩が止ったかに見えますが、DAMは東芝EMI技術陣の協力を得て、昨年「徳永二男VIP45」で大好評を博し、品不足となってしまった、ガラス原盤のクオリティ・アップに挑戦いたしました。前回のガラス原盤によるVIP45は、従来のアルミラッカー盤に比べ、数々の長所がありましたが、ただガラス特有の共振によると思われる高域のカラーレーションが欠点として、気になっていたことは事実です。今回は、ラッカーをガラス原盤の両面に塗布することで、その欠点をカバーしています。更に、この春の「西島三重子ライヴVIP45」で採用したヴァンデンハル改造カッターも使用し、スーパー・アナログ・ディスクとして万全を期しました。９月27日に行われたカッティングの模様は、別項の江川先生の記事をご覧いただければ幸いです。

本来、デジタルで録音されたものは、LPよりCDの方がより、デジタル・マスターに忠実になって当然なのですが、一般市販のCDとLPの中にも何故かLPの方が音が良いケースがあります。

このガラス原盤DAM45についても、一定水準以上の再生装置で聴いていただければ、スーパー・アナログ・ディスクの素晴しい能力がおわかりいただけるのではないかと思います。（今回のことからも、CDの製作プロセスから再生系まで、まだまだ未解明なことも多いようで、今後、CDがよりデジタル・マスターに忠実に再生できるよう、努力したいと考えています。）

前回の「サヴァリッシュ⊙マドンナの宝石」をお持ちの方は、今回の２枚組アルバムを、ジャケットから出して、前回のカートンボックスに収納していただければ、４枚組全集が完成いたしますが、もし前回のものをお持ちでない場合、まだ若干の在庫がありますので、入手方法等、各店でご相談ください。

この録音は、10月に東芝EMIからCDが市販されましたが、アナログ・ディスクが発売されることは無いでしょうから、本アルバムは、DAM会員の皆様だけの、完全限定レコード全集になるのではないかと思います。

なお、本アルバムの制作にあたり、サヴァリッシュ氏をはじめ、バイエルン国立歌劇場、バイエルン放送協会、真鍋圭子さん、そして東芝ＥEMI並びに関係各位に多大なご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

今後DAMといたしましても、アナログ、デジタル等方式を問わず、より良いソフトをお届けするべく、更に一層の努力をする所存ですので、今後とも皆様のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

ＤＡＭ推進委員会 DAM PC

## 録音を終えたサヴァリッシュ氏に聞く

# ほとんどが初めて指揮をした曲でしたが、かなり良い録音ができたと思います。

——インタビュアー：真鍋圭子

(M) ——今回の録音の曲目には、サヴァリッシュさんが初めて指揮なさるものも多かったと思いますが。

(S) ——ええ。私が指揮するのも初めて、このオーケストラが演奏するのも初めてという曲がほとんどでした。私達にとって最初の出会いであったにもかかわらず、良い録音ができたと信じています。これ等の曲目は、いわゆる〝最高の水準で演奏されるべきポピュラー曲〟で、私達がいつも演奏しているオペラやコンサートで取り上げられることはあまりありません。それだけに、日常これ等の曲を演奏しているオーケストラに比べて、より新鮮に緊張感と喜びを持って、先入観なしに取り組めたと思います。私達にとっては全く新しい凝縮された世界に入って行った訳で、とても楽しく演奏できました。

(M) ——録音の準備、そしてリハーサルにかなり多くの時間をかけられたように思いますけれど……。

(S) ——勿論です。私達の通常のレパートリーに入っていない曲が80%ですから。ただし、多くの作品は何処かで、何となく聞いたことのある曲なのですが、総譜を見て勉強しなければならないのは、どの曲でも同じことです。

(M) ——という事は、ドイツでも日常の生活の中で時々これらの作品を聞く機会が多い訳ですね？

(S) ——「天国と地獄」や「売られた花嫁」の序曲、特に「売られた花嫁」は当然のことながら私達のオペラ・ハウスのレパートリーの中に入っていますから、よく知っています。しかし、ヴォルフ＝フェラーリの「マドンナの宝石」は有名ですが、私達の劇場のレパートリーには入っていません。聴衆がこの曲を愛しているのは知っていますが……。

(M) ——この作曲家はサヴァリッシュさんの劇場とはゆかりの深い作曲家だったようですね。

(S) ——ええ、彼はミュンヘンに住んでいたこともあり、私の劇場で2、3曲の彼のオペラが初演されています。その中の1曲「四人の田舎者」は、今もレパートリーに入っています。彼の作品の中では「マドンナの宝石」の中の2曲の間奏曲とワルツは特に有名で、オーケストレーションも上手く出来ていることから、管弦楽曲のレパートリーに独立して入れられるようになった重要な作品です。

今回の録音のレパートリーの中でヨーロッパではあまり馴染みのないものといえば、カバレフスキーの「道化師」組曲で、私も知りませんでした。例えば、「ザンパ」、「はげ山の一夜」、「ルスランとリュドミラ」等は、何かの折に放送で聞いたことのある作品です。「ザンパ」序曲は、私が10歳の時に、私のピアノの先生と一緒に連弾に編曲してあるのを弾いたことがあり、言わば思い出の曲です。

(M) ——サヴァリッシュさんはコンサートでこのような曲を指揮なさったことがおありですか？

(S) ——勿論です。カーニヴァルのコンサート、大晦日やニュー・イヤーの特別コンサートではこのようないわゆるポピュラーな曲とか、ヨハン・シュトラウスのプログラムを振っています。オペレッタも昔、アウグスブルクの劇場で専門に振っていたんですよ。

(M) ——今回のような曲目の方が、例えばブラームスの交響曲などと比べて録音により時間がかかったとオーケストラの人達が言っていましたが……？

(S) ——そうです。レパートリーが私達にとって未知のものが多かったですから、完璧なものに仕上げるのに時間がかかりました。例えば「ルスランとリュドミラ」のように精密さとブリリアントな演奏が命とも言える作品では、ブラームスの交響曲のように大きな流れのある作品よりも、仕上げるのに神経を使い、長時間を要しましたが、全体として、満足できる録音になったと思います。

**インタビュアー／真鍋圭子**
真鍋圭子さんは在ミュンヘン10年以上の音楽ジャーナリスト。カラヤン、サヴァリッシュ、F＝ディースカウをはじめ、世界の著名音楽家と親密なお付き合いがあり、幅広く活躍をなさっております。

# 聴かせどころを心得たあざやかな棒さばきで、一曲ごとの味わいを上手に語ってくれる。

——岡 俊雄

ヘラクレスザール外観

ここに録音されたディスクは、サヴァリッシュではめずらしいプログラムがずらりとならんでいる。そしてここに収められた曲目のすべては、それぞれが独立したおもしろさにあふれた名曲ばかりである。料理でいえばア・ラ・カルトのように1品ずつを、そのときの気分によってききたい曲だけをえらんでたのしみたい音楽でもあり、筆者のように1930年代から50年以上レコードをきいたものにとっては音楽のたのしさを知らされるオーケストラ名曲ばかりがずらりとならんでいる。通してきくもよく、そのときの気分によって、好きな曲だけを好きな順序にプログラミングしてきくのもよく——といった性質のものである。サヴァリッシュのようにオーケストラのコントロールにすぐれた能力をもった指揮者が、きかせどころを心得たあざやかな棒さばきで、1曲ごとの味わいを上手に語ってくれる。そこから生まれた小品集のおもしろさは、すぐれた録音によって最上のオーケストラ・サウンドで音楽をきくたのしみを倍増させてくれるのである。

**SIDE1**

1．グリンカ：「ルスランとリュドミラ」序曲

ミハイル・グリンカ（1803-1857）はロシア近代音楽の祖である。19世紀のロシアの音楽文化は西欧にたいして明らかに後進国であった。旅行好きで青年時代から西欧を訪れたグリンカは、進んだ西欧の音楽技法をロシア民族音楽の土壌に移植し、最初のオペラの傑作「皇帝に捧げし命」（現在は「イワン・スサーニン」と呼ばれている）を発表したのは33歳のときで、その6年後の第2作が「ルスランとリュドミラ」で、この2作によりグリンカはオペラ史上に燦たる名前を止める。キエフ大公の姫リュドミラをめぐる3人の求婚者が彼女を得ようとさまざまな冒険の試練を重ねリュドミラの愛人であった騎士ルスランが栄冠を得る波瀾万丈の物語。西欧で早くから序曲だけが広く評判を呼んでいたのはロッシーニ風の活力にあふれた音楽が聴き手を魅了したからである。主要主題旋律はオペラの劇中のアリアやモティーフからとられているが終結部に、下降全音階進行（低音部に）を用いている。50年後にドビュッシーが用いて有名になった技法の先駆的使用としてグリンカの独創を示す有名な例になっている。

2．ボロディン：中央アジアの高原にて

アレキザンドル・ボロディン（1833-1887）は、グリンカの没後、19世紀後半にロシア音楽を確立させた5人組（国民楽派）のひとり。本職は医化科教授の公職の余暇に作曲をし、大作オペラ「イーゴリ公」や交響曲、室内楽などの傑作をのこしている。ボロディンは東洋的なものが大好きであった。1880年アレキザンドル2世在位25周年にあたり、12人のロシアの作曲家が、ロシアを描く主題の作品を書くことになったとき、ボロディンは、近東ロシア領を行進する軍隊の描写を主題にえらんだのがこの曲で、タイトルに〝管弦楽的スケッチ〟と附記されている。荒涼たる砂漠の情景がヴァイオリンの高音Eの持続からうかびあがってき、ロシア軍に護衛された隊商が遠くから来、また去ってゆく様子が音楽として描かれる。クラリネット独奏のロシア風の歌と、そのあとに出るイングリッシュ・ホルンの東洋的旋律の美しさがとくに印象的である。

**SIDE2**

1．ムソルグスキー：禿山の一夜

国民楽派最大の創造的作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839-1881）の1877年の作。彼は早くからゲーテの「ファウスト」のワルプルギスの夜のような奇怪な妖怪の容姿の音画化を意図したスケッチを書いていた。のちに5人組の仲間からのすすめで「ムラダ」という歌劇にその情景をもりこもうとして果たさず、彼の死後、リムスキー＝コルサコフによってオーケストレーションが完成1886年に初演された。キエフの町のちかくにある禿山（トリグラフ山）にまつわる伝説によったもので、聖ヨハネ祭の夜、地下からさまざまな悪霊が現われ、闇の神への讃美と饗宴をくりひろげるが、夜明けの鐘とともに彼等は退散する。音楽はその物語の完全な標題音楽である。

**SIDE3**

1．カバレフスキー：組曲「道化師」

ドミトリ・カバレフスキー（1904-1987）はショスタコヴィッチ、ハチャトゥリアンなどとならぶ、ソ連を代表する作曲家。1940年にM.ダニエルの児童劇「発明家と道化師たち」のための劇音楽を書いたが、そのなかの10曲をえらんで演奏会用組曲とした。劇は旅芸人たちが町の広場で公演するさまざまなスケッチからなったコメディ。組曲は、Ⅰプロローグ、Ⅱギャロップ、Ⅲ行進曲、Ⅳワルツ、Ⅴパントマイム、Ⅵ間奏曲、Ⅶ叙情的なシーン、Ⅷガヴォット、Ⅸスケルツォ、Ⅹエピローグのそれぞれがみじかい、たいへん機智とノスタルジーにあふれたもので、カバレフスキーの代表作となっている。

2．プロコフィエフ：「三つのオレンジへの恋」行進曲とスケルツォ

ショスタコヴィッチとともに20世紀ロシアにおける最大の作曲家セルゲイ・プロコフィエフが1919年に書いたオペラ（初演は1921年シカゴ）から6曲をえらんだ組曲は、彼のオーケストラ曲の代表作のひとつになっている。ここで演奏されているのは、組曲でもとくに有名な第2、3曲である。この頃、プロコフィエフは革命のはじまったロシアから出て日本経由で渡米、1933年にソ連に復帰するまでパリを中心に活躍していた。この頃の彼は20世紀の前衛的スタイルを強烈に打ち出していた時代で、シャープな音の扱いの巧みさでは第一人者であった。

**SIDE4**

1．リムスキー=コルサコフ：スペイン奇想曲

国民楽派5人組のなかで最年少だったリムスキー＝コルサコフ（1844-1908）は海軍士官であったが、29歳のとき退役して音楽に専念し、近代管弦楽法の大家として世界的に宣伝された。彼の華麗なオーケストレーションを示したのが1887年作の「スペイン奇想曲」88年作の「シェーラザード」である。「奇想曲」はとくに標題的な意味はなく、全体が五つの部分から成っている。アルボラダ——変奏曲——アルボラダ——シェーナとジプシーの歌——アストゥリアのファンダンゴで、それぞれスペイン的なタッチが、千変万化といってよいほど多彩なオーケストレーションで描き出されている。

ヘラクレスザール外観及び内部

# 音楽の現場にあった音響を正しく届けたいというスタッフの悲願が結晶している。

——江川三郎

東京港の近くに最近生まれつつある新らたな都市機能ベイエリアと呼ばれる一帯はスマートでエキゾティックにも感じられた。そのなかに東芝ＥＭＩのスタジオ「テラ」があった。ゆったりしたフロア・スペースのなかにある数種の録音スタジオは私が今まで見たどの会社のものより機能的、魅力的に見えた。この中にアナログＬＰが生まれるカッティング・ルームもあった。

これから貴重なガラス・アセテート原盤を使って第一家庭電器創立30周年記念盤の完結編が行なわれようとしている。原清介カッティング課課長、竹内昭五カッティング・エンジニア、里見清司プロデューサーをはじめスタッフの雰囲気の間に緊張感がただよっている。まるで演奏の直前のプレーヤーと同じ感じなのである。そこで私はＤＡＭレコード側のプロデューサーが現われるまでオーディオの話題を彼等に話しをしたりしてリラックスさせるように勤めたほどであった。

こんな時にＤＡＭレコードとはいったいオーディオ界で何んであったのだろうと考えてみる。それが市販されないサービス盤であるのなら世の中には適当な材料はいくらでもある。しかし、今までのＤＡＭレコードを聞いて、その音のなかから日常的な手馴れた手法から生まれては来ない優れたものが感じられる。それは採算を度外視してまでもマスター・テープにある音を会員にとどけたいという願いがあるからだと思う。いや、マスターを越えて音楽の現場にあった音響を正しくこの厚手重量盤を通じてとどけたいという悲願があるのではなかろうか。そのためのオリジナル録音であり、½インチ巾アナログ・マスターテープの採用、45回転スピードという他にあまり例を見ない手段がとられていると見てよい。それに前回の「ロマンス」に始まったガラス原盤の採用という他に例を見ないこともあろう。

だいたいこのガラス原盤はＶＨＤディスクという超高密度情報を記録する原盤でいささかの表面の凹凸があってもならない。ＬＤにしてもＣＤ原盤でも同じだ。ただ円盤サイズがＬＰのラッカー・マスターに適しているから活用されている。その録画に遠くの風景を反射させるとこれまで極めて平滑と考えていたアルミベースのラッカー盤とは段違いに鏡面性が高いことが誰の目にもわかる。それほどまでの平滑性がどうして求められるのだろう。カッティングという作業はプレイバックの逆でカッター・ヘッドの自重でアセテートラッカーに圧入されたダイヤ針がその層の中間に位置していなければならない。カッティングの針先は左右（同相成分）にも上下（逆相成分）にも動く必要があるからだ。ラッカー層の厚みのむらは記録される信号に変調要素となって音質に影響を与える。ガラス原盤のようにラッカー膜面厚が正確に確保されるとＤＡＭのプロデューサーとしてはまたしても音質向上のためにカッティング・レベルのアップを要求してくる。アナログの振巾限界に対する挑戦だ。昔は大振巾レコードで針飛びやビビるカートリッジはいくらもあったが、今日ではそんな心配はないし、ガラスの高剛性のおかげでゴースト音なども消えてしまった。ところが前回のカッティングでは録音レベルをあげすぎてカッター針がガラス面を突いたというトラブルがあった。強化ガラスだからダイヤといえどもたまったものではない。何百万円もするカッター・ヘッドの針先は砕けてしまったそうである。これほどまでの冒険をしてＤＡＭレコードはコマーシャル・レコードより倍近い５デシベルもの高振巾を保っている。前回の「マドンナの宝石」を聞いてもサヴァリッシュの棒さばきにオーケストラが息ずくように反応する様が演奏会場に座っているように聞えるのもこの大振巾カッティングの努力があったからである。一方コンパクト・ディスクの技術仕様ではこのＬＰよりも優るＤレンジがとれている。しかし、現実の音楽になるとリアルなダイナミズムが再現されて来ない。最近その原因が判りかけて来たが、その説明は別な機会にゆずろう。

やがてＤＡＭ制作側スタッフも集まった。たった一枚のガラス原盤で慎重に今回の難しいオーケストラ・パッセージのテストカットが行なわれる。高価なうえにもともと枚数が限られているからだ。これをこれまでのアルミ盤ラッカー・マスターとも比較試聴してみる。ガラス・マスターは限りなくテープ・マスターに近いことが一聴してわかるほどだ。なるほどＤＡＭレコードのプロジェクトがこれにこだわることも理解できる。かつてはラッカー・マスターの鮮度の高い音がこれほどまでに鈍っていたとは恐れ入った。

この現場に立ち会ってみて、カッティング作業が日常的な処理でなく、演奏と同じような一発勝負で行なわれていることもよく理解できた。スタッフ一同が緊張した雰囲気で仕事に立ち向っていたということもよく理解できたのである。われわれもカートリッジの針先をよく掃除してこのレコードを楽しもうではないか。

▲アルミ芯ラッカー原盤　▲ガラス芯ラッカー原盤

◀ヴァンデンハル改造カッターヘッド

## レコーディングにあたって

# 惜しみなく時間を費やし、入念な仕事が成されたといえる。

——里見清司

バイエルン放送協会との共同制作で、レコーディング企画が実現されたのは今回が本邦初であり、この画期的な仕事は1987年11月、ミュンヘンにて行なわれた。マエストロ・サヴァリッシュ指揮～バイエルン国立歌劇場管弦楽団の演奏で、まさに世界のメジャー・レーベルが手がける内容を我々サイドで具体化したのだ。

数々の打合わせを済ませ録音当日がやってきた。ホールはヘラクレスザール。長方形につくられたホールでコンサート会場としては世界の中規模クラス（1300人程度のキャパシティー）の代表的な存在であり、収録スタジオとしてもバイエルン放送（ＢＲ）が常設のコントロール・ルームを置いてあることでも解る通り、数々の名レコーディングを生んでいる。

今回の録音スタッフはＢＲの面々でトーン・マイスター（プロデューサー）がウィルヘルム・マイスター氏、バランス・エンジニアはハンス・シュミット氏が担当して下さった。彼らは朝６時半にホール入りし、マイク等のセッティングにとりかかる。ステージに椅子が並べられると日本の様に、マイクスタンドを立てマイクを取り付けるのではなく、天井からマイクケーブルを各々降ろす仕組になっている。ステージ上ではシュミット氏がトランシーバーでマイクケーブルの高さ等の調整をするためリモコンでオペレーターに指示を出す。前後の位置はホール２階手摺りから針金を張って調整する。全部で22本あったが２時間位で一応のポジションが決定、長年の経験で大体の位置は決っているようだ。

今回の録音はワンポイントマイク方式でなく、メインマイクを中心にしたマルチマイク方式、９時少し前、楽団員が集まり始め９時ジャスト、マエストロ・サヴァリッシュが現われ「詩人と農夫」のリハーサルに入る。暫くホール内でリハーサルを聴く、音がふくよかに涌き出てくるようであった。日本でこのような音は聴いた事がない。ホールトーンは実に透明で素晴しい。

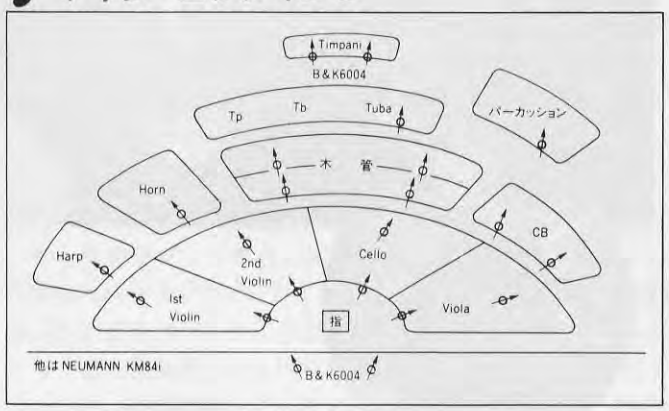
その後ホール客席後方奥の最上階にあるコントロール・ルームに戻る。まずシュミット氏がメインマイクで全体の響き、音色、バランスを慎重に聴き、各パートに立っているマイクのフェーダーを上げ始めてバランスをとっていった。マイスター氏より木管の音像を少し後にさげるようにとの事で、即座にシュミット氏はデジタル・ディレイにその音と元音をミックスする方法を用いた。この間、共同制作者としてマイスター氏は我々に、サウンド、楽器のバランスetc. ＯＫかとの最終確認をされたが勿論文句のあろうはずがない。

いよいよ本番が始まる。マイスター氏は、マエストロ・サヴァリッシュに信頼されているだけのことはあり、実に的確で細かい指示を出し進行させている。要所で楽器名の伝達を与えるとその通りシュミット氏は各々のフェーダー処理を行なっていた。本邦のクラシック録音ではフェーダーはあまり動かさないのが定石ではあるが、録音するにあたり定石にこだわらず関係者の合意のもとであればこの方法も良いのではないだろうか。

以前、私はアメリカで、あるメジャー・レーベルのオーケストラ録音に立ち会う機会に恵まれたのだが、その際短い時間帯の中で、最良の音源を作るという、現在世界のクラシック業界における典型例とその厳しさを垣間見た。ところで今回のレコーディングに関しては、演奏者が初めてのレパートリーとは云え、先の録音の約３倍の時間を費やし、入念な仕事が成されたと思う。特にマエストロ・サヴァリッシュのたぐいまれなヴァイタリティーと判断力、そしてあらゆる瞬間ごとに、真実の音楽的解釈をと奮闘して下さった成果が如実に表われていた。まさしく、ベストと云える録音が行なわれたのである。

DMR2000及びPCM1610

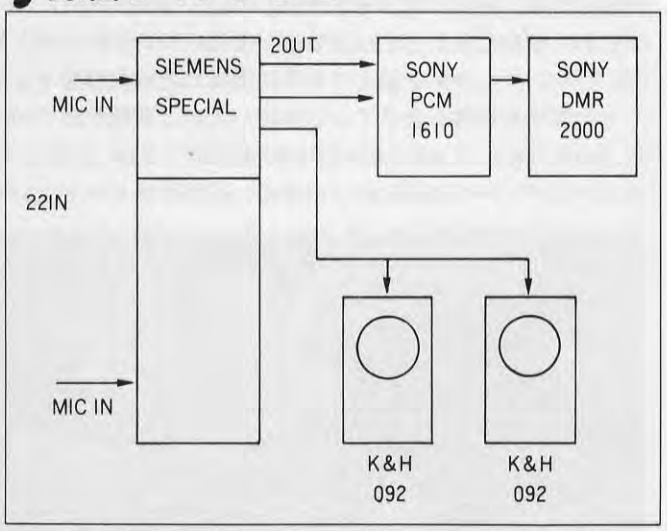
### マイク・セッティング




コントロール・ルーム

左）NEUMANN KM84i
右）B & K 6004

### 録音ダイアグラム




Recording Data
Console: SIEMENS・32INPUT 2OUT
Speaker & Amp: K&H・TYPE 092
Digital Master Recorder: SONY・DMR-2000
Digital Audio Processor: SONY・PCM-1610
Mic: B&K・6004
NEUMANN・KM84i
Digital Delay: EMT・445
LEXICON・MODEL 102

# DAMハイクオリティレコードについて

音楽パッケージもこのところDATをはじめCD-V、CD-I等、次々に新商品の開発が具現化し、ますます多品種化の傾向を呈しており、音楽プログラムに対するアプローチの仕方も更に多様化、より個性化すると思います。

今やアナログディスクは、完全にコンパクトディスクにその主流の座を奪われ、100年以上続いたアナログディスクと短期間のうちに世代交替したコンパクトディスクの優位性は、まさしく脅威的なものを感じます。しかし、話題に乏しいアナログディスクとはいえ、アナログならではの魅力と常に音の限界にチャレンジしても余りある可能性を秘めているディスクレコードは、尚一層興味と期待の大きいものがあります。DAMレコードは、一作毎に、マスタリングからメッキ、プレスに至る製盤の最新技術の導入を図り、常に限界とその可能性を求めて来た経過がありますが、VIP『ロマンス／徳永二男』でのガラス原盤を素材としたラッカーマスターを初めて採用した超重量200gレコードは、真に現状のアナログディスクの市場性とその背景を考えれば、一つの完成領域に到達したディスクであったと確信しております。今回のDAMレコードの特長は、その最高水準と確信する超重量200gレコードで採用した製造ノウハウと、更にコンパクトディスクやビデオディスクの周辺技術を導入することはもちろんのこと、特に新しい測定評価技術を採用することで従来とは別な観点での理論解析により音質改善の対策を進めて来た点にあります。一部の工程では、生産性を度外視した相当なリスクを覚悟で、手造り的な製造方法をとったり、まさしく音質重点主義で進めたアナログディスクの総力を上げ、チャレンジした私共の制作ポリシィーをきっと皆様は理解して頂けるものと思います。

今回の特徴は前回採用したものと同様オランダのカートリッジ研究者であるヴァンデンハル（Vandenhul）氏に依頼して、ノイマン社製カッターヘッド(SX-74)のドライブコイル、フィードバックコイルを、MC-OFC(Mono Crystal-Oxygen Free Copper)素材で手巻きした改造ヘッドを採用しました。ケーブル、ワイヤー素材による音質の違いについては、各種各様に論じられ興味ある点ですが、アナログディスクに残された貴重な試みとしてトライしてみました。

ディスク・レコードの平面・平滑性は音質へ影響する重要なファクターであり、高密度なハイレベルカットになればなる程音質や性能に大きく要因します。今回のガラス盤ラッカーマスターを採用したのも、平面、平滑性での優位性もさることながら、メッキ工程で温度変化に基因するストレスはアルミ盤にくらべガラス盤の方が格段に秀れておりディスクの基本性能であるプリエコー、ポストエコー現象を従来のアルミ盤の1/3～1/5まで改善致しました。その為、クロストーク、セパレーションの良さは複雑なオーケストラ・サウンドを一段と高解像度に再現し、ヴァンデンハル氏の手製による改造カッターヘッドのもつサウンドの魅力をも合わせ充分に御堪能いただけるものと思います。

アナログディスクの徹底した性能分析より、ビデオディスク成形の周辺技術を応用したプレス金型を新しく開発することからスタートした超重量200gレコードの製造技術とその設備を利用し、今回の150g重量レコード用プレス金型の精度や鏡面性を対処することで、ディスク面のストレス（歪）を最小限に押さえ込み、忠実な音溝波形を成形しています。更に今回の特徴は、メッキ工程にあり、これはコンパクトディスクの製造ノウハウと設備を採用して、クリーンルーム処理を行い、従来に無い超精密な電解メッキにより、ラッカー音盤の音溝を忠実に転写し、雑音の少ないS／N比の良い原盤を作成しました。

今回は特にディスクの面精度を改善する為に、メッキ工程に於いて、スタンパー作成は高密度な電解メッキ方法と研磨仕上げとによって、優れた平滑性が得られています。

これらの改善により、真円性の大幅な向上とワウフラッターの影響を極力減少させることで、低周波数帯域による変調が少なく、全体の分解能が改善され、楽器の音程がより安定感のある響きと、強奏部での解像力も一枚ベールを剝したような鮮明さは、アナログディスクの魅力ともいえましょう。又、音像の実存感はまさしくマスターテープのもつオリジナルサウンドの世界だと思います。

御存知のように、ステレオの音溝は、水平振幅は左右信号の和（L＋R）、上下振幅は、左右信号の差（L－R）として録音カッティングされており、DAMレコードで代表されるハイクオリティレコードは、通常のレコードより＋5dB程もハイレベルでカッティングされ、音溝幅の変化は、20μ～280μ(L－R)程に達する位、高密度化しております。

例えば複雑な音溝になればなる程、その再生時に於いてはカートリッジの振動エネルギーが逆にレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によってその振動がカートリッジへリアクションされ、クロストーク、セパレーション、歪等さまざまな音質劣化の要因になると考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコード重量を重くし、マス成分をコントロールすることで音質の影響の少ない帯域へ共振周波数を下げ、低域特性の改善を図っています。

この様な高密度レコードでは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来から高品質用として開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定効果の高い安定剤の組合わせにより、一層ゲル化性の改善を図り、更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果とあいまってきわめて安定度の高いS／N比の良いレコードを提供することが出来ました。

以上のように今回のDAMレコードは、現状の最高水準の製盤プロセスを経て制作されております。

デジタルサウンドとの出会いも最近は多くなって来ていると思いますが、是非、このアナログディスクのもつサウンドの魅力を充分に感じ取って頂ければ幸いに思います。

（開発技術部　原 清介）

## 30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33⅓回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用できますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が速くなるために、レコードの反りの影響が33⅓回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃～20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の磨耗状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質――プロユース材料使用

### カッティング・データ

| | |
|---|---|
| Cutting Date | : 27 & 28 Sept. 1988<br>STUDIO TERRA, CUTTING ROOM<br>Toshiba-EMI |
| Digital Master Recorder | : Sony BVU-200 |
| Digital Audio Processor | : Sony PCM-1610 |
| Drive Amplifier | : Neumann SAL-74B |
| Cutting Lathe | : 〃 VMS-80<br>Diamond Cutting Stylus |
| Cutter Head | : Neumann SX-74<br>(Vandenhul Version)<br>Non Limitter<br>Non Equalizer |
| Lacquer Master | : Glass Lacquer Master |

### スタッフ

| | |
|---|---|
| 総合プロデューサー | :フリードリッヒ・ウェルツ（バイエルン放送協会）<br>小山正敏（東芝EMI） |
| プロデューサー | :ウィルヘルム・マイスター（バイエルン放送協会）<br>里見清司（東芝EMI） |
| バランス・エンジニア | :ハンス・シュミット（バイエルン放送協会） |
| サウンド・エンジニア | :原 清介、田口庄司 |
| カッティング・エンジニア | :竹内昭五 |
| フォトグラファー | :アンネ・キルヒバッハ／小山正敏 |
| ジャケット・デザイン | :株式会社グラパー企画 |
| 録音年月日 | :1987年11月10、11、13、23、24、25日 |
| 録音場所 | :ヘラクレスザール、ミュンヘン |
| 制作協力 | :株式会社サンデュエット |
| 企画・制作 | :第一家庭電器株式会社 DAMPC |
| 製 造 | :東芝EMI株式会社 |

# Sawallisch Capriccio Espagnol

**WOLFGANG SAWALLISCH**
**BAVARIAN STATE ORCHESTRA**

**Side 1**
1. "RUSSLAN AND LUDMILLA" OVERTURE(GLINKA) ····· 5'19"
2. IN THE STEPPES OF CENTRAL ASIA(BORODIN) ····· 7'21"

**Side 2**
1. A NIGHT ON THE BARE MOUNTAIN(MUSSORGSKY) ····· 10'50"

**Side 3**
1. THE COMEDIANS, OP.26(KABALEVSKY) 13'54"
   PROLOGUE
   GALLOP
   MARCH
   WALTZ
   PANTOMIME
   INTERMEZZO
   LITTLE LYRICAL SCENE
   GAVOTTE
   SCHERZO
   EPILOGUE
2. from "THE LOVE FOR THREE ORANGES" OP.33(PROKOFIEV) ····· 3'59"
   MARCH & SCHERZO

**Side 4**
1. CAPRICCIO ESPAGNOL, OP.34 (RIMSKY-KORSAKOV) ····· 15'33"
   w/Luis Michal(Violin solo)··Side 4

**Produced by DAIICHI-KATEIDENKI CO.,LTD.**
**Manufactured by TOSHIBA-EMI LTD.**
**Made in co-production with Bayerischer Rundfunk**
**Photo by Anne Kirchbach**

**DAM PC**
**STEREO DOR-0159·60**